

東日本大震災
区内避難者の方達の今

「将来が見えない」

東日本大震災から2年8ヶ月が過ぎました。被災され荒川区にいられた方の正確な人数は、個人情報のためにわかりませんが、町屋の都営住宅には現在16世帯50名の方達が福島・岩手・茨城から避難され暮らしております。そのうち、福島の方は82%を占めています。若い方から高齢の方まで年齢も様々、罹災された状況もそれぞれ違います。福島から移られた一部の方は家や家財はあるのに汚染されていて帰ることも持ち出すこともできません。また、親子離れ離れで暮らす方もおります。

「お前のおかげで助かった」

岩手から避難されてきた高齢のご主人は漁師でした。奥さんに命を助けられました。

「土足で上がれと始めて言いました」

井餘田隆也さんは東日本大震災の3月11日、奥さんと東京に出掛けておりました。13時間かけて戻った茨城の自宅は、家中散乱し、変わり果てていました。そして、4月に荒川区に避難されてきまし

た。家を建ててまだ12年、直すのに170万円掛かると言われ、建設業者と2年に渡る交渉の上、この夏に更地に戻しました。今は奥様と二人で1Kの都営住宅で生活されてます。

「できる人がやればいい」

井餘田さんは、数少ない情報の中から被災者の方達の存在を確認して被災者の方達同士と、また地域との橋渡しをする点と点を繋ぐ活動をされています。こまめに情報を被災者のご自宅に提供されます。

「まず挨拶から」

言葉・文化・習慣の違う所での生活は避難されて来た方々には戸惑うことばかりでした。まずは、先住者の区民の方に認めてもらうことが大事とゴミ出しで会う人達と挨拶をすることから地域の方達と馴染んでいきました。違った時間帯にゴミ出しに行けば、また新しい方達と挨拶ができ知り合いになれる。些細な事かもしれないですが、そんな努力を皆さんされております。

「被災者だが被害者になるな」

人間関係が一番難しいところですが、井餘田さんは小さな問題を早期に解決するようにしていざごさは起きていません。

「話を聞いてもらって泣きました」

福島から移って来た遠藤さんは、話すことで自分の気持ちを吐き出せたとおっしゃっていました。

「荒川区に来て良かった」

区や社会福祉協議会の力添えで、少しずつではありますが、被災者の方達の気持ち前向きになったと井餘田さんは話されています。月1回の交流会も大勢の方が参加されています。

「添え木になって」

折れた心の添え木になって修復を待つ。井餘田さんの笑顔を見すると、ご自身も被災されているのに大きな心の添え木になっておられると感じました。

職場も経験も家財も全て無になった所から始めることは容易なことではありません。

ご縁があつて荒川区にいられた方達です。被災された方達の現状は何も変わっていないことを心の片隅に置いてください。

